

るごとの思ひ出でられて候ぞや、唐土に蘇武と  
 いつし人は胡國とやらむに棄て置かれしが、故  
 里に留め置きたる忍妻、夜寒の寢覺を思ひやり、  
 高樓に登つて砧を打つ思の末のとはりけるか、  
 萬里の外なる蘇武が方に故里の砧聞えけり、そ  
 れゆゑ憂をも凌ぐかなれば、わらはも思や通ら  
 むと、とても寂しきくれはどり、綾の衣を砧に打  
 ち、すこしの思を晴さむと、薄雲衣を取出し、いざ  
 いざ砧打たむとて、馴れてふすまの床の上、涙か

たしく狭庭に紫たちより諸共に怨の砧打つと  
 かや。

砧の巻歌淨瑠璃

衣に落つる松の聲、夜寒を風や散らすらむ、音づ  
 れの音づれの稀なる中の秋風に憂を知らする  
 夕べかな、面白の折柄や、頃しも秋の夕つかた、小  
 鹿の聲もものすごし、見ぬ秋風を送り来て、梢は

いづれ一葉散る空すさまじき月影の軒の葱に  
 移ろひて露の玉垂かかる身の思を述ぶる夜も  
 すがら嵐の音を残すなよ今の砧の聲添へて君  
 がそなたに吹けや風あまりに吹きて松風よ、  
 西わが心通ひて人に見ゆならばよその夢ばし  
 守るなよ破れて後はこの衣誰か来りて問ふべ  
 きと、きてとふならばいつまでも衣はたちもか  
 へなむ下歌夏衣薄き契は忌はしや君が命は長き  
 夜の月にはとても寝られぬに、いざいざ衣打た

うよ、かの棚機の契には一夜ばかりのかり衣、天  
 の川波たちへだて逢ふせかひなきうき秋の、梶  
 の葉もろき露涙、ふたつの袖や絞るらむ、水蔭草  
 の露ならば、波うち寄せよ泡沫の、その端明節文月の  
 曉や、八月九月げにまさしに、長き夜の、長き夜の、月  
 の色風景色まで砧の音や夜嵐の悲の聲、蟲の音  
 にまじりて落つる露涙ほるほる、はらはらと、い  
 づれ砧の聲やらむ、いづれ砧の聲やらむ。

かはり伊勢節

わが庵は都の辰巳しかぞ住む、世をうち山とえ  
い、人はいふなり、喜撰法師よ。

秘曲

天下泰平長久に治る峰の松風、雛鶴は千歳経る、

谷の流に龜遊ぶ。

桐壺の更衣の比翼連理の契もさだめなき世の  
習として夢のうちぞ悲しき。

たぞやこの夜中にまざれ、板戸を敲くは、雲井の  
雁がねか、水鶏のつぐる聲聲。

うらめしきわが縁、薄雪の契か消えにし人の形

見<sup>み</sup>とて涙<sup>なみだ</sup>ばかりや残<sup>のこ</sup>るらむ。 180

ゆきくれて旅<sup>たび</sup>の道<sup>みち</sup>、うらぞ寂<sup>さび</sup>しき波<sup>なみ</sup>の音<sup>ね</sup>かへら  
うと鹿<sup>しか</sup>の鳴<sup>な</sup>く聲<sup>こゑ</sup>に、われも夜<sup>よ</sup>もすがらなきわか  
す。

武<sup>む</sup>藏<sup>ざう</sup>の野<sup>の</sup>邊<sup>へ</sup>に月<sup>つき</sup>の出<sup>い</sup>づべき山<sup>やま</sup>も無<sup>な</sup>し、町<sup>まち</sup>より出<sup>い</sup>  
でて町<sup>まち</sup>にこそいれの。

行<sup>ゆ</sup>平<sup>ひら</sup>のこ<sup>と</sup>を松<sup>まつ</sup>雨<sup>かぜ</sup>に問<sup>と</sup>へば、村<sup>むら</sup>雨<sup>さめ</sup>ごと<sup>に</sup>に涙<sup>なみだ</sup>ばか  
りよの。

あ<sup>の</sup>君<sup>きみ</sup>様<sup>さま</sup>は稻<sup>いな</sup>荷<sup>り</sup>の紅<sup>もみぢ</sup>葉<sup>いろ</sup>色<sup>うす</sup>薄<sup>うす</sup>けれど、葉<sup>は</sup>末<sup>すえ</sup>に深<sup>ふか</sup>草<sup>くさ</sup>  
の<sup>み</sup>見<sup>み</sup>れば心<sup>こゝろ</sup>も消<sup>ぎ</sup>え消<sup>ぎ</sup>えと。

鈴<sup>すず</sup> 蟲<sup>むし</sup>

181 うらめしの鈴<sup>すず</sup>蟲<sup>むし</sup>松<sup>まつ</sup>蟲<sup>むし</sup>、鳴<sup>な</sup>くべき原<sup>はら</sup>では鳴<sup>な</sup>きもせ

で、君様と我との間を、されんや、され、あんれされ  
され、ちんからころりと鳴くの憎さよ。

葛の葉

わが戀は葛の裏葉のきりぎりす、うらみてはな  
き、うらみてはなく。

人目の關

思へども人目の關にとめられて心ばかり通ひ  
きぬらむ。

坊の津

名なの立たつ惜をしさに出でて見みれば庭にはの雪ゆきに躓あり、

184 雪消えな雪消えな。

坊の津の中の妹脊はかはるとも、君もかはらじ、  
我もかはらじ。

片撥かはり節

ひとかたならぬ思をすれば、枕もさけよ、夜こそ  
寝られぬ。

さす盃は三世の機縁、二世まで契るさすぞ盃。

短夜の月に語りも足らぬ山時鳥初音戀しや。

あこがれて、われは桔梗の花よ、情に一夜宿を刈  
萱。

185 夢の間の浮世、死んではいらぬ、おなさけあらば

186 命いのちあるうちに。

あら懐なつかしの松まつ蟲むしの聲こゑや、聲こゑきくたびに、おりん戀こひしや。

つれなき君きみにわひ馴なれそめて、浮うき名なは立たつ田た、おもひ深ふか草くさ。

恨うらみのあるも思おもひの餘あまり思おもはぬ君きみには恨うらみなや、つらや。

空そら飛とぶ雁かりは常とき盤はへ行ゆくが、我われ等らも故こ郷きやう都みやこ戀こひしや。

破やぶれた橋はしは渡わたるが大だい事じ、主ぬしある貴き様さまを引ひくが大だい事じよ。

寺てらの鐘かねは撞つきても鳴なるが、縁えんが盡つきぬればならぬものかな。

187 見みれば見みわたす棹さしさしやとどく、なぜにわが戀こひ

とどかぬぞ。

聲は聞けども姿は見えじ、君は深野の蝨斯。

雲井の弄齋

文はやりたしわが身は書かず、物を言へかし白紙が。

花を吉野と見る人の戀路に迷ふ山谷の果なさ

吉原かはり名寄ただのり

おもひすつるな、かなはぬとても、縁と浮世は末を待て。

花は散りてもまた春咲くが、君と我とはひと盛。





源氏狭衣菖蒲もいやよ君の姿を花と見る。

島船浮かれて山谷につきにけり。ぬぞ恨なる漕がば浮かれむ津よ花のさそふ時鳥あたら初音のがは告げ田生田の森吉野初瀬に花咲よ河内に八橋かほ模せいのしゆに吉田の里清原高雄因幡山正常坂や高瀬の浪となりぬべし西を遙に見渡せば相

かはり美人揃

外山だけや流れむ和泉なるふかき姿玉川はく三味線ぬし、かつの怨の玉葛たまかに見ゆを系てきに語るなわが買手や葛たまかに見ゆ山吹の花衣よしのかはる一節に籬籬の忍びにて岸の藤波濡れ濡れて小紫そふ花の香を初

萬代とも千代の世長し松が枝の緑の若さ常盤

君は照る日か、わりや降る雪か、見れば心の消え  
消えと。

の思ひ出す夜は枕と語る、枕物言へ焦るるに。

おもてみじかの更紗の小袖、うらみながらも着  
ておよれ。

枕屏風に書き置くほどに戀しかる時や起きて

見よ。

〇すすぐまいもの形見の小袖、なれし昔が薄くな  
る。

神や佛を怨むは輪廻、過去の因果よ是非も無や。

君を見たさに行きては歸り、何の因果の末ぢや  
やら。

夢に見てさへそさまの事を、はらと泣いては消え消えと。

逢ふたその夜の明六鐘を待つにかへたや暮六に。

禿おもはく踊

思ひわかるるその曉は鳥もはらはら、われも泣く。

涙で曇る今宵の月はおもひし山の晴れやらず。

袖の振りあはせさへ他生の縁と聞くに、況や枕を並べてうち解けて置いて、思ひし事を今語らひで、またもあらせは不慮でそる。

月日かけて變らじと契りし中を悔しや、増花あ  
れば見捨てらる見捨てらる。

浮世に移ろひやすき君は恨みぬ、數ならぬ身を  
恨めしき。

あらしの外ほかの友呼ぶ千鳥、君呼びかへせ小夜更  
けぬまに。

年たけて見るも二世までの契、いく千代なれや  
小夜の中山なかつま

かはりぬめり歌うた

君が來ぬとて枕な投げそ、投げそ枕に咎もなや。

狩場の鹿は明日をも知らぬ戯れ遊べ夢の浮世  
に。

千早振神の前での鈴の音、神樂乙女の颯颯の聲。

衣紋つくるひ通へどもあひ見ることとは程を経て、あふは優曇華うれしやな。

見ぬまでも夢現とも思ひしに今見焦るるそも  
じなるかな。

たれ初めし戀の道、いかなる人も踏み迷ふ、秋の  
夜もはや明けやすや、獨ぬる夜の長の夏の夜や。

名には似ず白波立てる隅田川、見ても見あかぬ  
吉野櫻。

未生以前がはるかにましぢや、何の因果に娑婆  
へ来て。

すすぐまいもの形見の小袖なれし昔が薄くな  
る。

天道八幡この上からは立つや浮名は無にやせ  
まい。

現か夢か幻の身を持ちながら遊べや歌へ酒の  
みて。

浮世に住めば思のますに月と入るやれ山の端に。

ちらりちらりと花めづらしき雪の振袖ちらと  
見初めしより今は思の種となる。

菊の籬垣結いたてられて、今はなかなかすいら  
れぬ。

右此歌は直之以正本令板行者也

我友丈阿ぬし年来ひめ置れたりける吉原小歌總まくり  
 といふ冊子を見れば先客人のくるわがよひのところを  
 はじめてうかれめの座敷のかたはた其頃のコ小歌をさへ  
 書まぜてそれがはしに萬治三年とあり其古雅なる事い  
 ふべくもあらず抑吉原町の傀儡屋はいぬる文祿慶長の  
 ころほひ此大江戸の大城ちかくところどころに在ける

を庄司何がしといひし人おほやけにねぎ奉りて元和三  
 年といふとし堺町の下つかたへ彼くぐつ屋をひとつに  
 つどへうつして葭原町とぞいひける此時葭の字を吉の  
 字に書改めたりといへり其後明暦丁酉軻遇突智神のあ  
 らびありしとしまた千束の龍泉寺村に移されてはじめ  
 て新吉原町となむいひけるかくて此冊子に萬治三年と  
 あれば今の新吉原町いできはじめてわづかに四年とい  
 ふとしの刊行なりけりされば此年文政二年まで凡百六  
 十年に及べり其風俗の質素小歌の古雅なる事まことに



いまの世のさまとはことにて珍らしともめづらかなり  
 かしかかる惜らしき冊子をいたづらにしみの棲となさ  
 ん事いとくちをしきわざなれば丈阿ぬしとはかりてい  
 ささか落字をも補はず訛字をもたださずありつるま  
 まに謄寫して再びさくら木にはゑりぬただおのれの本意  
 はふるきを後に傳へん事をおもふのみなむ

琢玉齋主人しるす

山家鳥蟲歌註

○七頁(山城一)は今もなほ祝歌其他として人の熟知する如く各地方に行はれてゐる。東  
 京木遣唄、八丈島木遣唄、遠江國濱名郡婚禮水祝唄、肥後國阿蘇郡元服婚禮祝歌(よい  
 やなあ節)三重縣室子神社船出歌等参照。

○八頁(山城二)——「寛永中小町踊の唄歌也。還魂紙料にくはし」(種彦本註) 小町踊の事、嬉遊笑覽卷五上參照。

○九頁以下山城六、一〇、一一、一四、二二、二三、二四は今尙、宇治郡で歌ふやうだ。

○九頁山城七——「鯨男とはぬめり男なるべし」(種彦本註)。

○一〇頁山城九——「關東にては今歌へり。あふた其夜は千里か」(種彦本註)。三絃樂「網笠」にも組入れてある。

○一〇頁山城一〇——御船唄留卷上(鹿兒島)に「暇たもるならやれ、今日ここにてたもれ、よの、明日は黒日て日がわるい。」

○一一頁山城一四——「さんやは三日月なり」(種彦本註)。御船唄留卷上(さまは三日月)に「さまは三日月宵々ばかりせめて一夜は有明に」とある。(越後甚句)に「三日月様だ、

宵にちらりと見たばかり」は異曲同巧であつて、此語は既に世諺のやうになつてゐる。

岡山縣眞庭郡白挽歌にもある。(増補松の落葉卷四古來中興踊歌百番荒木弓踊)參照。

○一二頁山城一六——「鸞娘の踊歌に此歌を用ゐたり」(種彦本註)東京木遣唄に在る。山城一七、伊賀四、伊豆一、武藏二、讃岐四、壹岐一もこの木遣唄中に見えてゐる。

○一三頁山城二〇——愛媛縣北宇和郡(端歌)「山を通れば山桃ほしや、身をも投げかけ、揺すらば落ちよ、心つれなの山桃やらう……」。

○一四頁山城二二——「あの君様は伊勢の濱育、眼元にしほがやれこぼれ、かかるえ」(糸竹初心集)。

○一四頁山城二三——「……木隠れてよしなや、鳥羽の戀塚秋の山……」(閑吟集)。

○一五頁山城二六——「大原木かはい、かはい、黒木めさいの……」(松の葉卷一卷)。

○一八頁大和八——「やまがらが籠の内での怨ごと、籠が小籠でもんどりうたれぬ。」(松の葉第一卷)。

○一九頁大和一——「曆こゆみと歌ふなるべし、細字の文を三島曆に譬ふることいとふるく見えたり」(種彦本註)。

○二〇頁大和一三——「解し難き歌なり」(種彦本註)。小夜中山の故事を引いたには違ない。

○二三頁大和二三——「玉兔」参照。

○二五頁河内三——(若緑卷四夜深船)。

○二六頁河内六——「けなりやは羨ましや、關西地方語に今もけなるいといふ。」……五六人も風俗作り、藝子に目を使はせ、下なる見物にけなりがらせける。(胸算用卷三、

都の顔見世芝居)お夏様と鴛様と此蚊屋で睦語しやんしたら、いかな藪蚊もけなりかろ(歌念佛中之卷)。

○二六頁河内八——(御船唄留卷上、富士の裾野)に同歌又「小倉の野邊の一本薄、いつか穂に出て亂れあふ」糸竹初心集)。

○二七頁河内一〇——(嚴島御島廻歌)の(御床酒神社端歌)並に愛媛縣喜多郡雨乞踊歌に類歌がある。

○二八頁河内一二——(心中宵庚申中之卷)に引用。

○二八頁河内一三——御船唄留卷上(浮世ゆめり)参照。

○二八頁河内一四は権津二一に再出。

○三〇頁河内二二——「……なんぼ戀には身が細る、二重の帯が三重まはる」(松の

葉第一卷、八幡。

○四二頁攝津一——「鳥も通はぬ山なれど、住めば都よわが里よ」(松の葉第一卷、鳥組)。

○四七頁伊賀三は美濃一に再出。元録正徳頃の流行唄中、有馬節に類歌がある。(増補松の落葉卷三、古今新左衛門作古今節有馬の松)参照。

○四七頁伊賀四は前の歌と共に人口に膾炙してゐる。例へば(増補松の葉卷五、古來中興はやり歌、咲いた櫻)。

○四七頁伊賀五——「若い時に離れたは沖の中で櫓棹の折れた如くよ」(鎌倉郡焼米搗歌)。

○五二頁志摩三は下總一に再出、其條に「天保二年の頃江戸にて行はれぬ、見ゆるぢやあるまいしと歌へり。(種彦本註)。

○五四頁尾張三は但馬二に再出。

○五六頁遠江二——「遠州濱松廣いやうで狭い、そこでもつて車が二挺立たぬ……」  
(萬紫千紅)。

○五九頁甲斐二——「高い山から谷見れば、お萬、お萬可愛や染分薄て布晒す」。(越後刈羽郡三がい節)。

○六〇頁伊豆一——御船唄留卷上(浮世ぬめり)参照。

○六一頁相摸一——「大工さんより木挽さんが憎い、とがのない木を引分くる」。(福岡縣八女郡木挽唄)。(若緑卷之四、しよがへ節)。(鍵の權三、道行)参照。

○六五頁安房二——(茨城縣新治郡、酒造唄)にも見え、人口に膾炙する。

○六九頁常陸一——蓮の「め。め。めは根の事なり」(原本註)。

○六九頁常陸二、三——(潮來節)参照。

○七五頁飛驒一——流行域廣く、今日九州にも残つてゐる。有名な古い俚諺。(鹿持雅澄編、巷謠編卷上)及び(松の葉第三卷さいこの節)参照。

○七九頁下野一——長歌に残存。

○八〇頁陸奥一——きんばしは擬寶珠の事なり(種彦本註)。

○八八頁越前四——かいじょうは海上で無く、寧ろ甲斐性か。

○九二頁越中二——鮎は瀬に住む、鳥は木に住む、人は情の陰に住む、水汲踊を一踊(巷謠篇卷上、土佐國安藝郡土佐踊歌)。

○九二頁越中三——死てまた來る道さへあらば、死てみせたや、面當に(潮來風)。

○九三頁越中四——ねばるのなは「鬢付の事」(種彦本註)。

○九四頁越後四——こめいことは「來いと云ふ事也」(種彦本註)。

○九五頁佐渡二——「お前釣竿、わしや池の鮪、釣られながらも復かへる」(潮來風)。

○九六頁佐渡三——まなごは「真砂なり」(原本註)。

○九六頁佐渡四——つよばみは「餌食みなり」(原本註)。

○一〇〇頁丹後六——……(男)早少女の手上手が笠のはを整へたよ。(女)丹後但馬の田所で、笠のはをそろへたよ……(廣島縣安佐郡、田植歌八調子夕歌)参照。

○一〇二頁但馬四、五——四は類歌五は同歌、丹波與作、與作小萬夢路の駒)に在る。

○一〇三頁因幡一——備中一に再出。

○一〇三頁因幡二——中國筋の田植歌に類歌が多く見える。其數種を挙げれば「朝まとの小鳥が露にしよんぼり濡れてな。(下歌)うらうらと鳴いて立つ、露にしよんぼり(島根縣大原郡田植歌、田の神)。「朝まの小鳥が露にそほれ出えてなう、うらうらと鳴いて通る、露にしよほれ(廣島縣雙三郡田植歌)。されば本書のなへをとるは蓋しないでとほる

の轉訛であらう。

○一〇四頁因幡三——此歌も中國の田植歌を参照して始めて解し得る。「おなり殿の御だるやら、赤い帷子で、びらりしやらりと、赤い帷子でよ。(廣島縣安佐郡田植歌)」「おなりどの着たる又の帷子はな(下歌)よい帷子な、裾はそんより(島根縣大原郡田植歌、田の神)。  
おなりどは田植時の飯焚といふ義であるが、後出さんばい様の祭に關係して、上古以來、農事の儀式には缺く可からざる一種の巫女めいた役である。

○一〇四頁因幡四——「晝間米つくはとへ、十二唐白(い)れてな、嫁御なんども出てつきやれ、十二がら(おし)(島根縣能義郡田植歌)、「晝間麥を搗くやら、十二唐白で女房達も出て見やれ、十二唐白で(廣島縣山縣郡田植歌)。中國地方に類歌が多い。

○一〇六頁伯耆四——御晝飯は出來たさうな何がお汁の買やら、磯のはたの若芽よし、そ

れがお汁。(島根縣能義郡田植歌)島根、廣島、山口等の諸縣田植歌に大同小異の類歌が多い。

○一〇七頁伯耆五——××××——及び××共に bifurcatis 次の××は pism

○一〇八頁出雲二「ひろまもち考ふべし」(種彦本註)とあるが前出の晝飯米又晝飯と同じく、所謂「おなれど」の焚く田植時の晝飯である。中國の田植歌には晝飯を中に置いて前後に別れてゐるのが多い。「ひろまもちが御座るさうな、白い帷子でな、ひらりしやらりと、

白いした(ぶら)」(島根縣能義郡田植歌)其他に類歌が多い。

○一〇八頁出雲三——廣島縣各地の田植歌に、さまれ或はさまり又さまの、さんざい様といふのがある。さまれは發語の重複語か、とにかくさんざい様は田植の時、降し奉る田の神即ち農神或は諸穀の靈を指す。「三把の苗を手にとって」靈を喚びおろす故に此名のあるのか、三拜、三寶等の當字を用ゐらる。本文の歌に酷似してゐるのは「やれ、これ

のな、嫁御さん、どこ育、やれ、稻の裏穗ののぎ育（島根縣大原郡苗取歌）。

○一〇八頁出雲四——出雲大社の神主として中古から交替して来た千家と北島との兩家。

○一一三頁美作一——だいと（種彦本註）とあるが、十六七はとだいの稻よ、打たれど腰がしなやかに（巷談編卷上、安藝郡土佐踊）を参照。

○一一四頁美作四——糸竹集にある近江歌と大同小異（種彦本註）とあるが、古い小唄を愛好する人の熟知する所、笠おろせ、笠も笠、濱田の宿にはやる菅の白いとがり笠を、めせなう、めさればお色の黒げに（閑吟集）などが最古の一つか。

○一一六頁備前二——しあくは鹽飽島か。

○一一六頁備前三——天和三年種久が江戸下りに五井とあるか（種彦本註）。

○一一七頁備前五——岡山縣眞庭郡白挽歌（種彦本註）参照。

○一一七頁備中二——思ひ廻せば照る日が曇る、はあ、照る日が曇る、冴ゆる月夜が雨となる。（福岡縣絲島郡石搗歌）。

○一二二頁周防二——新茶の茶壺よ、なう、入れての後はこちや知らぬ、こちや知らぬ。（閑吟集）。

○一二二頁周防三——誰も知る歌、例（増補松の落葉卷五、古來中興はやり歌、吉田小女郎）。

○一二四頁長門三——せくなせきやるな、浮世の事は命長くばめぐり合ふ（愛媛縣北宇和郡田植歌）。

○一二五頁紀伊五——山が焼けても山鳥立たぬ、子ほど可愛き者はない（福岡縣三井郡）。

○一二八頁阿波一——原文讀み難い、安宅甚太か。

○一二九頁阿波四——小歌總まくり、禿おもはく踊（種彦本註）参照。

- 一三一頁讃岐四——(千葉縣安房郡雜論)參照、流行域は廣い、X consensuere
- 一三一頁讃岐五——寛永作竹齋物語○さかの浦濱にや二子山とてあるに、なぜにそなたにや子が無いぞ(種彦本註)。
- 一三五頁土佐二——(三重縣志摩郡よいこの節)參照。
- 一三五頁土佐四——(福岡縣八女郡機織唄)參照。
- 一四二頁豊後二——「早少女の袂衣は染め干いたよな、けんげや花色に染めほいたよな」(島根縣邇摩郡田植歌紺やながれ)。
- 一四三頁肥前一——げんごべは源五兵衛を囃したか。
- 一四四頁肥前二——きちきちぼうすは、蛸蠟、へつくつくぼうし、今のおおしつুকつく。朔の日、雨ふり暮らす、時雨だちたるに、未の時ばかりに晴れて、つくつくぼう

し、いとがしましまで啼く(蜻蛉日記)。

○一四四頁肥前三——×××× bifurcatio

○一四五頁肥前五——「沖に見えるは丸屋が舟よ、丸にやの字の帆が見える」(岩手縣西磐井郡田植歌)及(御船唄留卷上、花笠踊)。

○一四八頁大隅一——「忘れればこそ思出さず候」と名妓の文章にて有名であるが、既にふるくより、例へば「思出すとは忘るるか、思出さずや忘れれば」(閑吟集)。

○一五二頁對馬一——(嬉遊笑覽卷二、中、器用)に喜多村信節は(一代男二)に據つて、昔の煙管は皆長く小者に擔がせたものと言ひ、また古畫に證據を求めた。「かぐと頭痛の癒る印傳、花見るに憎い煙管や五服纏」(續五元集、寶永二年吟)を引用してゐる。



## 小歌惣まくり註

- 一六一頁「さかな」酒興を助くるもの。
- 一六二頁原文「はやよのさま」は「はやあのみち」或は「かのちみ」。
- 一六二頁「天が下」(宇和島藩主御座船唄)参照。
- 一六三頁原文「久よかるべきためよ……うゑよすみよ……」君が代の久しかるべきためしには神も植ゑけん住吉の松也(註) (大和國春日祭若宮神樂舞歌、伴信友撰、中古雜唱集所載) 其他類歌ひろく行はれてゐる。例へば(愛媛縣北宇和郡船唄端歌)。

- 一六三頁「烏だに憂世厭ひて墨染に染めたるや、身を墨染に染めたり」(閑吟集)。
- 一六三頁「人買船は沖を漕ぐ、とても賣らるる身を、唯靜に漕げよ船頭殿」(閑吟集)。
- 一六四頁「あの君様はなめの木の育、ゆなれど、おちぬ、めなしの木よ」とあるが「あの様は梅かすもか杏子木か、え、ゆするに落ちぬは心なしの木か」(愛媛縣北宇和郡船唄端歌)に據つて假に直して讀んで置く。
- 一六五頁「十七八はやれ座敷の飾、芍薬牡丹庭のかざり」(御船唄留卷上、十二や三)。
- 一六六頁原文「かはりまし」は「かはり夫し」即ち「かはりぶし」又「あらし」は「あふみ」か。
- 「これから見れば近江が見ゆる、笠買うてたもれやれ、近江笠やれ近江笠、」(糸竹初心集)。
- 「これから見れば近江が見ゆる、笠買うてたもれ、うんやあ、これの、近江菅笠を、うんやあ、これの」(大奴佐)の替歌であるのは、世の熟知する所。喜多村信節は名著嬉遊笑覽卷二、

中器用の一章を費して、古の小唄類に據つた笠の考證を繰述してゐる。隆達の「破れ菅笠、縮緒が切れて」これに連なる一蝶の朝妻船の贊なども有名だ。按ずるに「身は破れ笠よ、なう、着もせて掛けて置かるる(閑吟集)が類歌の根源に近く、足利末期より既に行はれてゐたか。近江笠の歌多くあるなかに「おかつた塗笠七年早い、菅笠にかへておめしやれさ、近江の笠は、いよこの、さいたさ、形なりはようて、白癩、きようてさ(松の葉第三巻端歌さわぎ、塗笠)が最も面白いと思ふ。後出「近江笠」「なれなれ茄子」の二歌は巻諸篇卷上にある。天保三壬辰秋土佐國田野浦の旅館に鹿持雅澄が盆踊の詞章をきいて筆記したのである。

○一六六頁「れんぼ」——(大奴佐)(紙鳶)。

○一六七頁(ゆふべ夕)の歌は(洞房語園)に所載、寛文年間の時花唄、土手節の「かるる

山谷の草深けれど、君がすみかと思へばよしや、玉のうてなもおろかごさる、よその見るめも厭はぬわれぢやに、お笑ひやるな、名の立つに」を憶ひ起させる。本書巻頭の土手馬駄賃表及び書中の挿繪に、小室節を歌ふ白馬の馬士のあるのを見ては同じ頃に行はれた「春の日に糸遊わけて、柳手折るは誰々ぞ、白き馬にめしたる殿子よ(洞房語園)にすぐ思ひつく。古歌をつれに讀む人は、つづいて「白銀の目貫の太刀をさげ佩きて奈良の都をれるは誰が子ぞ、れるは誰が子ぞ。」(神樂歌、拾遺集)を記憶に上ほせようし、近古小説に親むものは西鶴の織留などに引いた「名殘惜しさは朱雀しゅじやかの細道」をも聯想するたらう。

○一六七頁「吉野の山を」は(糸竹初心集)(大奴佐)(紙鳶)其他の集にて名高い歌。(嬉遊笑覽卷六上、音曲)に(安部泰邦寶曆十年記、東行話説)中の「岡崎にかゝる……わが娘ど

もの筑紫琴を習ひし時、花の吹雪の歌あげて後、岡崎女郎衆と誦ひしと思へばさぞなむと左右を顧れども、さやうのものなし……」を引用して、昔は初にこの花の吹雪即ち「吉野の山を」の歌を教へたものだと言じてゐる。

○一六八頁「なれなれ茄子」は（大奴佐）に初出。いづれ初秋茄子の美味を賞玩する所より出た歌であらう。（嬉遊笑覽卷十上、飲食）に「嫁にはくれじ架に置くとも」（古諺）、これははや末なりの秋茄子憎まれにたる嫁がしうとめ（望一後度千句）また（大奴佐）をも引いてゐる。今日の俗では「秋茄子を嫁に食はずな」といふ諺を解釋して、姪婦に不養生となるからといふのもある。しかし、始は美味を嫁に吝むといふ心であつたらうか。さうして（大奴佐）の挿繪によると、姑と嫁とが仲善ささうに、背戸の茄子の垣を見てゐる。多分姑は嫁を逆待するといふ噂でも立つといけないから、茄子に對して、實のなることを願つ

てゐるのだらう。（御船唄留卷上、なれなれ茄子）参照。

○一六九頁「夢の通路云々」は反魂の方士にかけたのか。

○一七〇頁「ほそり」といふ名の唱歌は「忍ぶ細道に松と胡桃は植ゑまい、まつとてその身がくるみでもなし、おじやれとて、まことに來る身でもなし（大奴佐、破手）を始めとし（松の葉第一卷）には「下總ほそり」と題して「忍ぶ細道」のほか、なほ六首ある。本書の歌に「ほそりの、やれ、出處は」とあつて、西國巡禮、六番大和の壺阪、三十三番美濃の谷波の語がある處から、嬉遊笑覽の著者は、ほそりを西國巡禮歌から出たのだらうかと論じてゐる。

○一七一頁「われも他國よ……」（淋敷坐之慰、吉原大夫浮世たゞき）に取り入れてある。

○一七二頁「いざや、そもじをおもはくと名付けつつ」……ここにおもはくとは意中の人

の義。徳川文學にては普通の語であるが、今も唄には残つてゐる。「おもはく様に添はれぬかと、淺草の觀音様に七日夜籠り」(岡山市、酒造歌)。

○一七四頁原本「そみん」とあれど、始の本字の時蘇武とあつて、この武が民と誤られ、終に假名でみんと書くに至つたものか。

○一七六頁冷泉節——「これは昔、淨瑠璃姫物語十二段の文句の内にもさてもやさしの冷泉やといふ所へ付けたる節なり、名節故今の世まで傳り用ゆる也。この譯知らぬ人、冷泉節とて別に音曲のあるやうに覺えたる人もあれば序ながらしるし置くなり」(明和八年板竹本播摩少掾音曲口傳書)。

○一七八頁「秘曲」——「皆今の組歌の中に入れたり、是等もかの筑紫樂の唱歌を三絃のかたに取りたるものもあらむ」(嬉遊笑覽卷六上、音曲)とある如く、「天下泰平」桐壺「恨め

しきわが縁」「薄雪の」は六首を一組としたる同名の組歌中にある。而して、「誰ぞやこの夜中に」は越天樂又の名、落組中「誰ぞやこの夜中にさいたるかどを叩くは、叩くとも、よもあけじ、宵の約束なければ」桐壺(後に水鷄の曲)中の「誰ぞや今宵小夜更けて柴の戸ほぞを叩くは、尾上おろしの音づれか、水鷄の告ぐる聲々」とを混じたものか。(知音の媒及び淋敷坐之慰)参照。

○一八一頁鈴蟲——(淋敷坐之慰、きりぎりす口説木遣)参照。

○一八二頁葛の葉——「葛の葉葛の葉、うき人は、葛の葉のうらみながら戀しや」(閑吟集)。

○一八三頁ばうのつしばらく坊之津として置く。

○一八四頁片撥替節——「寛保二年豊竹越前掾、江戸へ下りし時、石橋山鎧襲といふ上るりの内、老の浪枕といふ節事に見れば見渡す、棹さしやとどく、なぜにとどかぬわが思ほ

んにさと歌ひ江戸中にはやれり、今に琴習ふ始に之を教ふ(操年代記)これが片撥替節の廣く行はれしはじめか。

○一八七頁「寺々の鐘」の歌で思ひ出すのは、異邦趣味の香高い長崎節である。昔より今に渡り来る黒船、縁がつくれば鱈の餌となる さんた まりや Santa Maria (松の葉巻一卷) Amacao の池を、そりや、千尋とおしやる、そりや、それよりも、そりや、深い、そりや、賤が思さ、しゆらいな(御船唄留卷上、長崎)。

○一八七頁「見れば見渡す」——(御船唄留卷上、浮世ぬめり)。

○一八八頁「聲はきけども」——(淋敷坐の慰、投節品々)参照。

○一八八頁「文はやりたし」——「文はやりたし、詮方なかよう、心の物を言へかし」(閑吟集)。天道八幡涙でくらすな一字讀まれぬなこの文が、よまれぬ一字、一字よまれぬ

なこの文が(大奴佐)。

○一八九頁替名寄、替美人揃——(淋敷坐之慰)中の「太夫夷おろし」「太夫祭文」「太夫萬歳」「太夫浮世叩」「紋盡の叩」「太夫口説木遣」又は(若緑巻四さわぎ)の「菅搔の歌」などに類歌がある。さうして、(寛永十九年印本、あづま物語)等に依つて、名寄を探究して、其左側に圈點を施して置いた。

○一九四頁「思出す夜は」——(淋敷坐の慰弄齋片撥昔節)に同歌。

○一九五頁「神や佛を」——(同上弄齋片撥節及びしよくりしよ節)に同歌。

○一九七頁「思ひわかるる」——「深き思を語ると、な、すれば、鳥も鳴く鳴く、な、黎明に、鳴く、鳴く、な、鳥も鳴く鳴くしののめに」(大奴佐)。

○一九九頁替ぬめり歌——浮世詞のぬめりは(嬉遊笑覽卷九下)に(慶長九年恨之介草

子(の)「夢の浮世をぬめろやれ、遊べや狂へ」を引いて解釋してある。又元祿の頃三絃手、岸野次郎三、古唱歌を尋ね探り、或時、ぬめりといふ曲節十七段を作つたとあるを参照すべきか。

○一九九頁「君が來ぬとて」——類歌同歌諸處に見える。「一夜來ればとて、咎もなき枕を、豎ならけに横ならけに、なよな、枕、なよな枕」(閑吟集)また(御船留卷上富士の裾野)。

○二〇〇頁「千早振」——廣く流布してゐる。例へば(鹿兒島縣川邊郡盆踊歌、熊毛郡、祭禮踊歌)。

○二〇一頁「秋の夜もはや」——(御船留卷下、思へば永し)(潮來考、秋の夜を長いといふ……)参照。

○二〇一頁「未生以前が」——前の「表短の形見の小袖」と同じく元祿正徳年間の時花歌

「さんざ節」にある。

○二〇二頁「現か夢か幻の」——奴詞にて同じ歌がある。伊達も浮氣も命のうちよ、やがて死ぬ、死ぬ、ひつびけ、うん飲め、騒げ、あすをも知らぬ身に。(松の葉第二卷、山谷踊)。

○二〇三頁「浮世に住めば」——山の端に住めば、浮世に思の増すに月と入るやれ、山の端に(淋敷坐の慰、弄齋片撥昔節)。

○二〇三頁——「ちらりちらりと」——柴垣、柴垣、柴垣越しに雪の振袖、ちらとみた、振袖、雪の振袖ちらと見た。(糸竹初心集)。

○二〇三頁「菊の籬垣」——「な見さいそ、見さいそ、人のすいられぬ。」(閑吟集)「龍田土産にもみぢ葉もろたへ、それもすいた秋の頃へ、すいた、それもすいた、いよこ

のへ、橋の上なる御若衆様のへ………(御船唄留卷下、十八番)

# 小唄畢

大正四年十月三日印刷  
大正四年十月五日發行

定價金六拾五錢  
(金子製本)

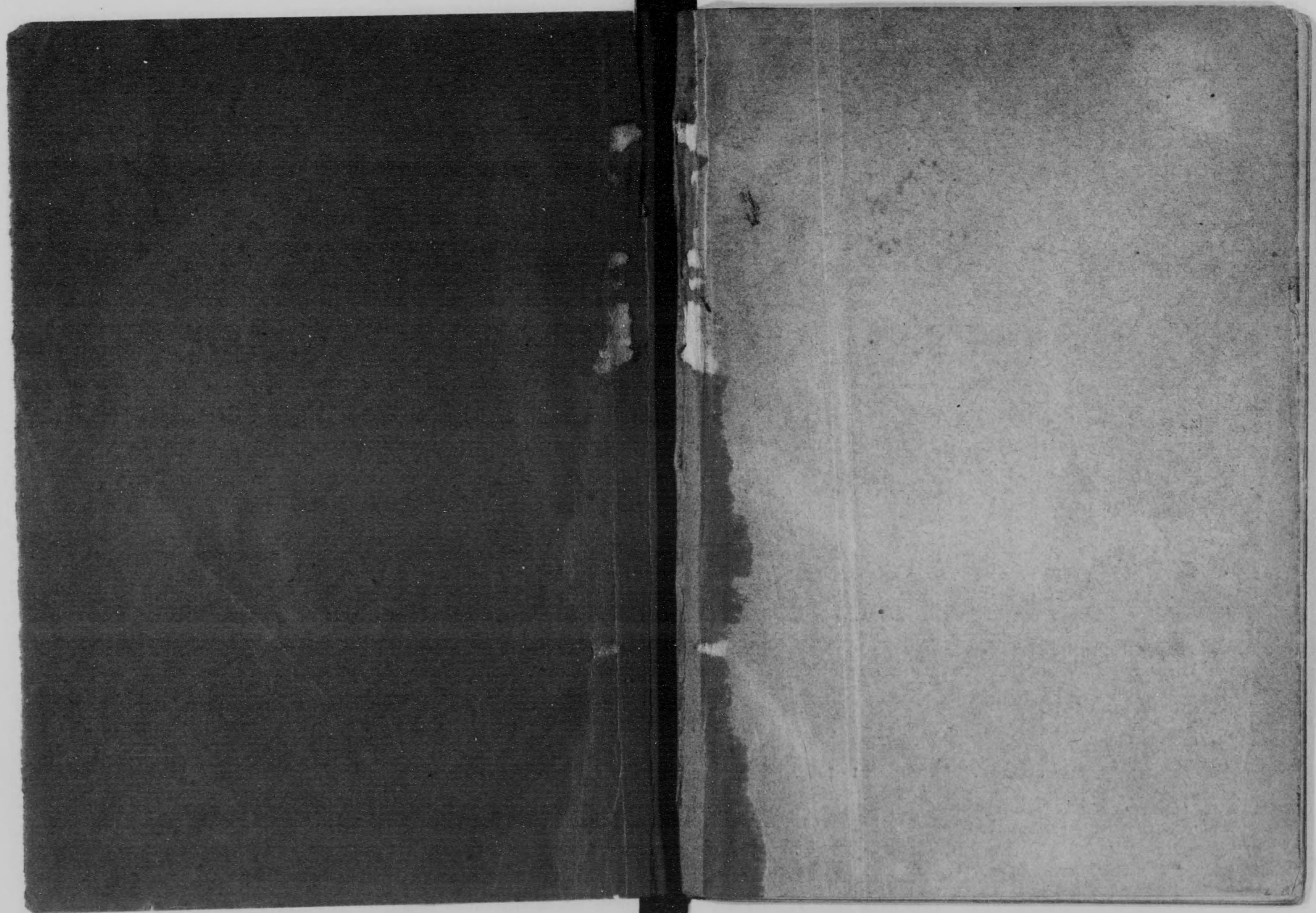
著作  
所有

著作者	上田敏
發行者	東京市麻布區坂下町十三番地 北原鐵雄
印刷者	東京市芝區愛宕町三丁目二番地 淺野榮作
印刷所	東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社

發行所  
發賣元

東京市麻布區坂下町十三番地  
阿蘭陀書房  
振替東京一四四八九番

東京市神田區表神保町三番地  
合資會社  
東京堂書店  
振替東京二七〇番





終